

私たちが考える万博

第7回 「コロナ時代」の万博とは

2025年、コロナ禍を経て開催される、大阪・関西万博。先行きが不透明な時代のなかで歩みを進めるために、われわれはどのように未来に向けたメッセージを発信するべきだろうか。そのヒントを、100年前、同じ大阪で、奇しくもパンデミックの後に行われた博覧会から探ってみたい。

構成 加藤しのぶ



池永寛明

いけなが・ひろあき

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所顧問。1955年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部にて人事勤務、営業部門にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス入社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年に同研究所長に。2019年より現職。近著に『日本再起動―パラダイムシフトの群像 Case002』。

「浮き足立つ時代」

5月上旬の現在、新型コロナウイルスの感染状況は落ち着いているとは到底言えない状況です。コロナ禍は決して一過性のものではなく、少なくとも令和一桁の時代にはその影響が続くと私は思っています。

近代の歴史を振り返ってみると、改元後の新元号が一桁の年代に大きなうねりが起こっていることに気づかれます。たとえば平成一桁年代はバブルが崩壊し(平成3年)、平成という時代を象徴づける社会現象のひとつとなりました。昭和の場合は金融恐慌(昭和2年)にはじまり軍国主義の台頭、十五年戦争へと向かった時代に当たります。そして明治時代は、それまでの価値観がすべて覆された明治維新によるパラダイムシフトが起こりました。つまり新元号一桁年代というのは、先行きが

不透明でどこか「浮き足立つ時代」だと言えるでしょう。そして、この時期に起こった社会現象がその時代の空気・社会的価値観に影響を与え、決定づけることが多いと思うのです。そう考えると、令和時代はコロナ禍がその社会現象となるでしょう。今回はそうした「コロナ時代」に開催される大阪・関西万博を通して伝えるべきことを改めて考えていきたいと思います。

大大阪記念博覧会が教えてくれること

歴史をひもといていくと、実は現在と同じような状況で行われている博覧会があることに気づきます。それは1925年に開催された大大阪記念博覧会です。何が同じかといえば、この博覧会はパンデミックを経た後に開催されたものだということです。

現在、コロナでパニックになっているのと

るだけでも多くの発見や学びを得ることができ

きます。なかでも、私が注目したのは、天王寺会場の本館(勸業館)で行われたという展示内容です。博覧会誌によれば、「大大阪の精神的文明と物質文化とを象徴する各種の出品及び生産工業品を網羅し」「その発達の経路をたどり、大大阪を概観することを主眼」としながら、大阪の多面的な未来のかたちを示した「27の大阪」を発表したというのです。「水の大阪」「光と燃料の大阪」「名物名所の大阪」など27のテーマが設けられ、それらを手がけたのは川崎巨泉や南木芳太郎など錚々たるメンバーです。

これを見た時、自分たちで未来をつくろうという先人の気概に、体が震えるような感動を覚えました。そして「27の大阪」の思想は、今の大阪にも生きていて、われわれはその恩

恵を受けているのだらうと感じ入りました。

大阪・関西万博でもその視点を忘れてはいけません。われわれもコロナ禍後の50年、100年先に伝える、たとえばオンラインで「50の未来の世界」を世界のメンバーが自由に議論する場をつくり、みんなで考えるという取り組みはどうだろうか。

「コロナ時代」の大阪・関西万博で未来に何を伝えるのか

では、われわれは今、未来に何を伝えなければならぬか。それを考えてみましょう。

コロナ禍における社会変化の起点は、テレワークやオンラインの増加によりこれまでとは社会における関係性が変わってきたことにあります。必ずしも会社や現場に行かなくても、いつでも、どこでも仕事ができるように

なったことで「働く場」と「暮らす場」のボーダレス化が進みました。コロナ禍は、DXを本格化させ、場と時間を変革し、仕事・医療・衣・食・住・買・遊・学という生活機能のかたちを変えつつあります。しかし、時代の風土や技術が変わっていく一方で、人としての本相や物事の本質はなんら変わりません。変化しているのは、社会の価値観にもとづく方法論に当たる部分です。

大阪・関西万博では、この「変わる」と

変わらぬこと」をどう伝えられるかが重要になります。つまり、方法論が変わっても、われわれの生活のなかで変わらないものの意味を問い、そこから、これからの時代がどのような社会になるかを見出さなければならぬわけですね。私はそれは「つながり」ではないかと考えます。仕事・会社中心の生活から、人・家族中心の生活へと変わってきたことで、人への気持ちや愛情といった感情、親子・家族・地域の人や友人との関係が何よりも大切と思う人は増えています。愛情、人とのつながりなどという日本人は照れが先立つ部分がありますが、コロナ禍という世界中の人々が経験している出来事を経て社会的価値観が大きく変わろうとする今、恥ずかしがらずに失われつつある「つながり」ということの本質を取り戻し、未来へつないでいくことが必要なのではないでしょうか。

■ 大大阪記念博覧会「27の大阪」展示と主任委員

「水の大阪」	横山徳太郎
「キネマの大阪」	活動写真研究会
「空の大阪」	福知新次
「交通の大阪」	瓜生苞
「教育の大阪」	小笹国雄
「保健の大阪」	皆吉賢
「信仰の大阪」	西阪保治
「運動の大阪」	木下東作
「社会事業の大阪」	山口正
「子供の大阪」	児童文芸研究会（川崎巨泉）
「女の大阪」	橋詰良一（宇崎純一）
「農林の大阪」	阪井勝一
「名物名所の大阪」	南木芳太郎
「工業の大阪」	平佐惟一
「劇と音楽の大阪」	石割松太郎
「建築の大阪」	日本建築協会
「食料の大阪」	藤原九十郎
「文芸の大阪」	木谷蓬吟
「電化の大阪」	木津谷栄三郎
「光と燃料の大阪」	横山巖
「工芸の大阪」	片岡長信
「服飾の大阪」	森本頼平
「趣味と娯楽の大阪」	入江新三郎
「商業の大阪」	安田進平
「貿易の大阪」	坂野達也
「家庭の大阪」「文化の大阪」	白松喜久代